

野鳥たより

—北海道—

第48号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和57年6月21日



ヤマセミ 中標津町養老牛 1981. 1. 撮影者 梅本正照



緑と野鳥(1).....藤巻裕蔵..... 2

カワラヒワのふるさと.....新妻 博..... 4

ネイチャーセンターからの便り.....安西英明..... 6

昭和57年度総会経過報告..... 8

探鳥会報告.....野幌・ウトナイ湖・野幌..... 9

探鳥地案内(羊蹄山麓半月湖周辺).....11

探鳥会案内・鳥民だより・編集後記.....12

も く じ

緑 と 野 鳥 (1)

藤 巻 裕 蔵

日一日と陽があたたかになり、雪の下からアスファルトが見えはじめてきた。あと1か月もすると夏鳥が姿を見せはじめるだろう。次いで樹が緑となってくると大方の夏鳥が出そろふ。一年のうちで、私はこの雪どけの頃と新緑の頃が一番好きである。今では緑のない生活なんてとても考えられない。

緑は野鳥にとっては生息環境として欠くことのできないものである。われわれ人間の生活領域が広がるにしたがって、野鳥の生息場所は急速に失なわれつつある。森

林の伐採、農耕地の拡大などいろいろあるが、中でも極端なのが都市環境の拡大である。野鳥の生息場所は無に等しくなり、ドバトのように特定の種だけが栄えるようになってしまう。しかし都市化がすすんでも、都心部を除けば、その周辺の住宅地の庭や公園などわずかでも植物でおおわれた空間があって、何種かの野鳥がすみついている。都市の中にどのくらいの緑があれば、野鳥がどのくらいすみつけるのだろうか、帯広市をひとつの例として紹介しよう。

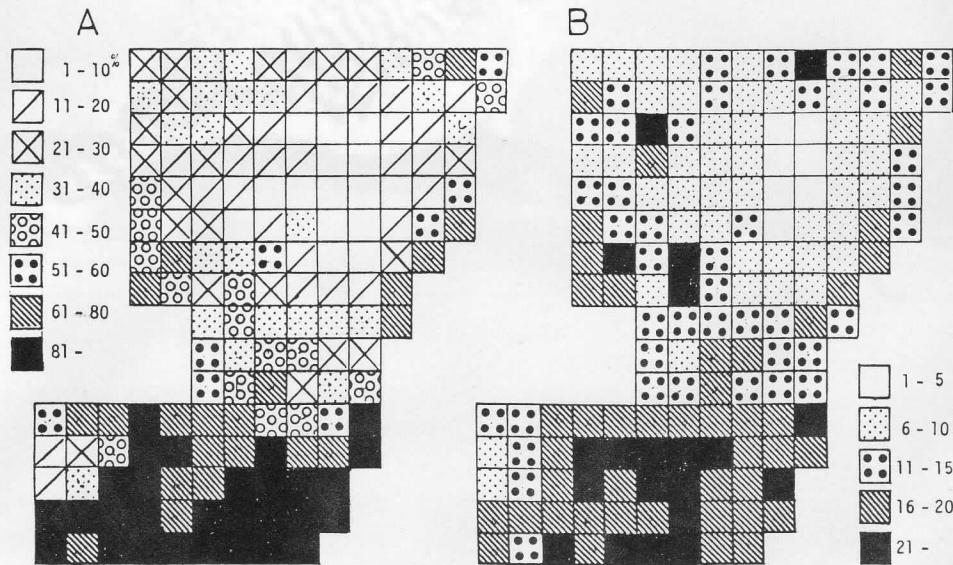


図1 帯広市の都心から郊外にかけての植被率(A)と繁殖期鳥類の種数(B)

帯広市は人口15万人の都市であるが、人口が集中しているのは国鉄帯広駅を中心とした部分だけである。この都心部からその周辺の住宅地、農耕地にかけての40km²の範囲を1辺500mの方形区157個を設けた。都心部は植被がほとんど0、住宅地では11~30%。郊外の新興住宅地になると、周辺に空地があるため植被は30~50%にもなり、農耕地では100%近くなる部分もある(図1のA)。

野鳥の繁殖期に157個の方形区でどのような鳥が見られるかを調べたわけである。種数は植被の少ない都心で少なく、もっとも少ない区画では4種であった。種数は住宅地では6~10種、さらに郊外の住宅地では11~20種、農耕地や札内川沿いの河川敷では16種以上であった(図1のB)。図1のAとBを対比してみると植被の割合とそこに出現する野鳥の種数に関連があることがわかりただけだと思う。図1の上部では植被の少ない区画が多いが、Bで見ると21種以上の野鳥が見られたところが5区画ある。これは神社、公園がある区画である。区画内の植被率が低くても公園のようにまとまって樹木のある所では野鳥が多くなるようである。

植被率と鳥類の種数との関係をよりはっきりさせるため、両者の関係をグラフにしてみた(図2)。この図から植被が多くなると種数が増加するが、植被率70%以上ではそれほど増加していないことがわかる。農耕地で植被100%でも、そこにすめる鳥は限定されるから、30種以上の鳥が見られることはほとんどないわけである。

では、植被が増えるにしたがってどのような鳥が生息できるようになるのだろうか。植被率10%以下の区画でよく見られるのは、トビ、ハクセキレイ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ドバトである。植被11~20%の区画ではこのほかにキジバト、カッコウ、ノビタキ、コヨシキリ、キビタキ、アオジ、コムクドリ、ムクドリがよく見られるようになる。順次よく見られる種をあげる。21~40%ではイソシギ、オオジシギ、ヒバリ、モズ、アカハラ、エゾセンニュウ、ホオアカ、シマアオジが加わり、ドバトが少なくなる。40~60%ではさらにビンズイ、オオヨシキリ、ベニマシコ、シメ、アカゲラが加わり、61%以上でこれらにエナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ニュウナイスズメ、ツツドリが加わる。このほかにヒヨドリやセンダイムシクイなども観察されたが、これらは少なかった。

都市やその周辺の植被にはいろいろあるが、大まかに見ると草地型と林型とがある。前者は住宅周辺の空地、牧草地、放牧地、畑などがあり、後者には公園、神社、

農耕地内の残存林、防風林などがある。植被が増える場合、草地型の植被のことが多く、林型は多い区画でも30%くらいである。したがって、上に述べたように植被が多くなるとまず草原性の鳥類が見られるようになり、植被がかなり多くなってその中に林が含まれるようになると森林性の鳥類が見られるようになるわけである。

植被の中味を検討すると、林か草地かによって見られる種数に差がでてくる。林と草地がそれぞれ45%以下だと種類は1~5種であったが、10%と30%以下では6~10種、10%と70%までの範囲では11~15種となり、林が10%以下では草地が多くなると16~20種の区画が増えたが、21種以上の区画は少なかった。一方、林が10%以上になるとほとんどの区画で16種以上が見られるようになり、とくに林20%以上では21種以上の区画が多くなっ

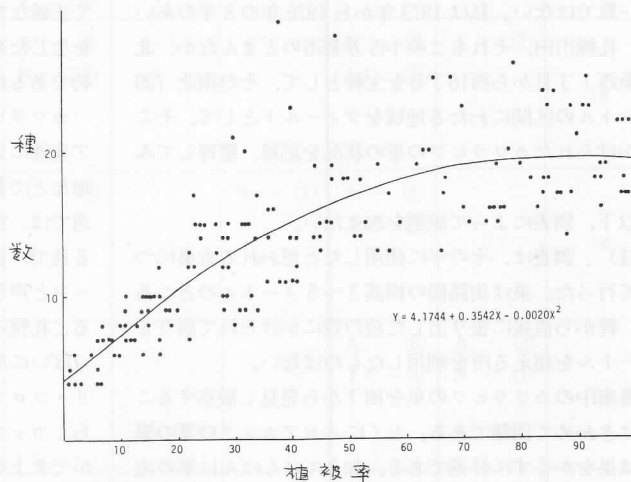


図2 帯広市における植被率と繁殖期の鳥類の種類の関係

た。このように、林の占める面積が多くなって植被率が高くなる方が、草地が多くなるよりも種類が多くなった。

都市を住みよい環境にするには緑の量を増やすことが大切であることは、多くの人が認めるところであろう。そのことが、野鳥の生息場所を増やすことにもつながっている。しかし緑であれば何でもよいわけではない。多くの鳥にとって草地だけの場合より林が加った方がよいのである。公園や庭をつくるときには芝生より灌木状の樹木や高木があることが望ましいし、石や鉄の柵より生垣がよい。農耕地では防風林や所々に残っている小さな林が環境を多様にする上で重要な働きをしている。これまで湿潤すぎて農耕地に適さない所が林として残されてきたが、最近ではこのような所もどんどん伐採されて牧草地などに変えられてしまっている。都市の中に緑を積極的に作り出すと同時に、農耕地内の防風林や小さな林を残しておきたいものである。



カワラヒワのふるさと



新妻 博

ばたん雪が舞うような大綿虫も影をひそめ、ほんとうの雪が空からこぼれて来そうになると、広葉樹の葉はすっかり落ち尽して梢にかけたカラスの巣やブッシュに残された何やらの野鳥の巣が目につく。とりわけカワラヒワの巣は村落、市街地の庭木、そして何処よりも多く都市の街路樹に見られる。それで、ふだんは野鳥に関心のうすい通りがかりの人の注意をひく。あんなところに鳥の巣が…、まさしくあんなところである。それが決して少数ではない。私は1973年から1978年の6年のあいだ、札幌市内、それもこの145万都市のどまんなか、北1条西1丁目から西16丁目を主幹として、その南北700メートルの区間にわたる地域をフィールドとして、そこにかげられたカワラヒワの巣の状況を記録、整理してみた。

以下、別表によって説明を加えたい。

(註) 調査は、その年に使用したと思われる古巣について行った。巣は街路樹の樹高3～5メートルのところに、幹から直接に張り出した枝の股にかけられて居り6メートルを超える所を利用したものはない。

蕃殖中のカワラヒワの巣を樹下から発見し観察することはきわめて困難である。とくにニセアカシアの葉の繁りは巣をかくすに好適である。加えてひんばんに車の走る公道であり、ハンゴをかけて確かめるなどの作業は無理なので、蕃殖時の観察は行わず、落葉後に於て樹上にかげられた古巣をカウントした。巣材は外側をビニールなどのヒモ屑が毛髪状に乱れたものを固く巻きつけて使用し、カラマツその他の小枝を組みこんである。内部は枯草の葉や茎、根などにジュータン様の綿毛、犬などの抜け毛や羽毛を底に敷いている。この碗型の巣の内部(穴)の直径は外側の $\frac{2}{3}$ 程度である。巣はきわめて精巧であり、葉が茂ることによって風雨から護られているので、蕃殖時はもとより、落葉後もしばらくはほとんど落ちることはない。古巣は落葉期以後に、巣の上に積った雪の重みと、凍結、融解をくりかえし厳冬の風雪にさらされるので、早春の候カワラヒワが帰来するころには崩壊してビニールの糸屑がひっかかっている程度になってしまう。したがって、前年の蕃殖に使用された古巣が、翌年に重複してカウントされることはない。

この表に示した区割は条を以て記入し丁目を省いたが、西1丁目～西16丁目に限定される。また、通称の北2条通りは西に向って左側が北1条であり、右は北2条に当るので、何条通りとせず、北1条とあるのは北1条

の北1条通(国道5号線)と北2条に対向する北1条の通りの街路樹、即ち西に向って左側にあるものを意味している。この表に於て巣の数がいちじるしく差があるのは樹の植栽がきわめて少い場所(例えば南1条)があることと樹種に深いかかわりがあり、年による差異は、官庁よりの委託業者が行う剪定整枝の作業がきわめて任意で、ある年は落葉直後のためカウントが間に合わず、巣はずでに取除かれていた等の事由にもとづく。したがって正確な営巣数の記録をすることは期しがたくバラツキを生じた事がある。この調査は6ヶ年間のデータの集約であるが、調査期は11月上旬～下旬に集中している。

カワラヒワはアトリ科に分類される小型の鳥で、アジア東部に分布、日本では九州以上の林、畑、河原、市街地などで蕃殖し、本州以南では留鳥である。しかし北海道では、雪が地上から消えるとすぐあらわれて春を告げる鳥で、札幌周辺では4月に入ると木のとっぺんでビーンと声を張る鳴きごえがきかれる。4月も半ばをすぎると札幌の都心部はカワラヒワのやさしいサエズリでいっぱいになる。翔びながら追いつ追われつのキリキリキリ・コロコロの鳴き声はあかるい。そのとき彼らはおそらくカップルを形成していると思われるが、テリトリーができ上るのはそのあとである(中村浩志・野鳥1980年8月号、野鳥の生活をさぐる12・カワラヒワ)。

北海道で蕃殖したカワラヒワは、そのほとんどが本州に渡ってしまうので、彼らの古里は北海道ということであろう。ふるさととは遠くにありて…の感懐ありやなしや。しかも札幌の都心部の街路樹を故郷とするものがあるのだから面白い。私はカワラヒワの故郷の廃家を調べて歩いているモノズキのひとりである。毎年11月はその季節、樹の梢を探して歩いていると首が痛くなる。時には自転車にぶつけられたりする。

カワラヒワのテリトリーが確立して、いよいよ巣造りに入るのはニセアカシアの開花前後と私はみている。ニセアカシアは芽立ちがおそく、ようやく葉が開ききるのは花がこぼれ始めてからである。カワラヒワが安心して巣造りするのは、その頃からになる。ヒバリと共に春の尖兵であるカワラヒワが巣を営むまでの恋のシーズンはずい分と長い。ちなみに長野県千曲川沿岸の蕃殖期は3～7月とかなり長く、3～4月はマツ、スギなどのエバグリーンをえらび、5月に入りカキ、アンズなどの落葉樹に営巣をはじめるといふ。中村浩志氏の報告によればニセアカシア林(河原)での蕃殖成功率はゼロとなっ

ている（産卵数26）。これらの資料を対照するときに、

カワラヒワの巢の分布・樹種

1973～1978年

1. 札幌では蕃殖期6～7月
 2. 主としてアカシアなどの落葉樹の街路樹を利用
 3. 見通しのわるい庭や林を好まない
 4. 冬は渡去する
- などの特ちょうが見られる。

蕃殖期に入る前のカワラヒワは群棲して餌場を往来し、カップルを形成してからも、この傾向はつづくので、私の住んでいる南区真駒内や近郊の畑地では5月下旬でも数十羽のカワラヒワ集団をみることがある。北海道での蕃殖期はかなりおそいが、それはハコベ、タンポポ、ノボロギクなど餌となる種子の成熟期とも関係しているかもしれないが、都市部ではニセアカシア並木の葉の成育と大きくかかわっていると思われる。カワラヒワの蕃殖はさきに誌したようになりおそく始まるが、卵は12日でふ化し、ヒナはふ化後十数日で巣立つから、それでもけっこう間に合うということである。つぎに別表の分析と解説を少し加えて置きたい。

- A 巣は北1条(国道5号線)に集中して造られている。とくに4丁目～13丁目に集中度が高い。
- B 樹種はニセアカシアが圧倒的に多い。これは植栽数の多いことによるが、枝ぶりや葉の繁りに大いに関係すると思われる。

C 南北に通じる街路樹にはきわめて少く、東西に貫通し、交通渋滞が多発し有害ガスの充満する道路に沿った街路樹を好んで選ぶ傾向がある。この傾向は市内の他の場所にも見られる。(京都でも同様であり、樹種はすべてケヤキである。)

D この調査で記録された巢の数は1973年38、74年19、75年18、76年14、77年14、78年9個となっているが、先述のように整枝剪定時との関連もあるので正確とは言えない。年ごとに減少の傾向があることは明らかであり、その原因として巢をかけるに適した街路樹の減少があげられる。街路樹の減少は風害による倒木、ビル工事による被害と、代替植樹の幼齢化である。

E この地域は札幌市のいわゆるビジネス街、官公庁の密集地を含んでいるが、植物園、道庁前庭、知事公館庭などがあり環境としては良好である。しかし営巣樹のほとんどは、国道など主要道路に沿う街路樹であり、高層ビルに囲まれて半日蔭となる悪条件にはまったく影響をうけていない。

F 大通り一帯は緑地であり、樹木が多く樹種もバラエティに富むが営巣例はきわめて少い。

G 営巣樹種はニセアカシア82例、ナナカマド2、イタヤカエデ6、ヤマモミジ6、ホオノキ(いちじるしく剪定され小枝を発生している)1、イチョウ13、シナノキ(若木)、スズカケノキ(若木)各1例が挙げられる。以上から見て営巣に適した条件がととの

地区 年	札幌市 中央区 南2条 南1～ 西1～ 16丁目	〃 南1条 西1～ 16丁目	〃 大通 西1～ 16丁目	〃 北1条 西1～ 16丁目	〃 北2条 西1～ 16丁目	合計 営巣数
	'73			A-① K-① IC-①	A-⑳ Y-② K-② IC-②	
'74	A-① N-① K-① H-① Y-①			A-⑦ Y-②	A-⑤	19
'75	A-① K-①			A-⑫ IC-①	A-③	18
'76	A-③		S-①	A-⑤ IC-⑤		14
'77				A-⑥ IC-④	A-③ N-①	14
'78	P-①			A-⑤ K-①	A-① Y-①	9

(註) A=ニセアカシア K=イタヤカエデ Y=ヤマモミジ IC=イチョウ N=ナナカマド H=ホオノキ P=スズカケノキ S=シナノキ
(例) A-⑤はニセアカシアに営巣のもの5例あり

っていれば樹種には関係しないものと思われる。ニセアカシアに多いのは樹木数が多いことが主な理由であるがニセアカシアが好条件を備えていること、とくに毎年の剪定の効果がそれを補っているものと思われる。しかしすぐ近くにニセアカシアがあるにもかかわらずナナカマドや3メートルに達しないシナノキの若木などに営巣するのは不思議である。

H 巢の密度はかなり濃く100メートルほどの区間に

3～6個をかぞえる場合があり、なわぼりは直径30メートルとする中村浩志氏の調査に一致する。

(参考文献)

- ・羽田健三監修 続・野鳥の生活〈築地書館〉
- ・日本野鳥の会神奈川支部編・神奈川の野鳥〈有隣堂〉
- ・東村山市立図書館編・東村山の野鳥
- ・京都府農林部林務課編・京都の野鳥

〒061-21 札幌市南区真駒内南町1-6-1

ネイチャーセンターからの便り

レンジャー 安西英明

ウトナイ湖サンクチュアリは、昨年5月10日にオープンさせていただきまして後、半年余を経過いたしました。私ども日本野鳥の会がここまでやってくれましたのも、皆様のご支援、お力添えがあったからこそであり、心からお礼申し上げます。

何分初めての試みでございましたので、運営方法から体制づくりまで、一から組み立ててゆかねばなりませんでした。また、予想以上の反響だったこともあり、業務

に追われ、ごあいさつ、お礼が遅れ、恐縮しておりました。とりあえず半年間のネイチャー・センター近辺で確認された鳥のリストをまとめましたので報告いたします。

また、今年1月から、毎週火・水曜日を休館日とし、その分、関係方面との話し合い、種々の調査などにあてる考えでおります。

それでは、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

(57年1月投稿)

ネイチャーセンターから見られた鳥たち (1981. 5~10)

種名	月	5	6	7	8	9	10
カイツブリ科							
カイツブリ							
ハジロカイツブリ							
ミミカイツブリ							
アカエリカイツブリ							
サギ科							
ダイサギ							
チュウサギ							
アオサギ							
アマサギ							
ガンカモ科							
マガン							
ヒシクイン							
ハイイロガン							
コブハクチヨウ							
オオハクチヨウ							
コハクチヨウ							
マガモ							
カルガモ							
コガモ							
ヨシガモ							
ヒドリガモ							
オナガガモ							
ハシビロガモ							
ミコアイサ							
ウミアイサ							
ホシハジロ							
キンクロハジロ							
スズガモ							
ホオジロガモ							
ビロードキンクロ							
コオリガモ							
ワシタカ科							
ミサゴ							
トビ							
オオタカ							
ハイタカ							
ツミ							
ノスリ							
チュウヒ							
ハヤブサ科							
ハヤブサ							
チゴハヤブサ							
ツル科							
タンチョウ							
クイナ科							
オオバン							
バン							

種名	月	5	6	7	8	9	10
チドリ科							
コチドリ							
シギ科							
トウネン							
ハマシギ							
エリマキシギ							
ツルシギ							
アオアシギ							
タカブシギ							
オグロシギ							
チュウシャクシギ							
ヤマシギ							
オオジシギ							
キョウジョシギ							
セイタカシギ							
アカエリヒレアシギ							
カモメ科							
ユリカモメ							
ウミネコ							
アジサシ							
コアジサシ							
カモメ							
ハト科							
キジバト							
アオバト							
ホトトギス科							
カッコウドリ							
ツツドリ							
ヨタカ科							
ヨタカ							
アマツバメ科							
ハリオアマツバメ							
アマツバメ							
カワセミ科							
カワセミ							
キツツキ科							
アリスイ							
ヤマゲラ							
アカゲラ							
コゲラ							
ツバメ科							
ショウドウツバメ							
ヒバリ科							
ヒバリ							
セキレイ科							
キセキレイ							
ハクセキレイ							
ビズイ							
モズ科							
モズ							
アカモズ							
ミンサザイ科							
ミンサザイ							
ヒタキ科							
ノゴマ							
ジョウビタキ							
ノビタキ							
トラツグミ							
アカハラ							
エゾセンニュウ							
マキノセンニュウ							
コヨシキリ							
オオヨシキリ							
センドアイムシクイ							
キビタキ							
コサメビタキ							
ツグミ							
エゾビタキ							
エナガ科							
エナガ							
シジュウカラ科							
ハシブトガラ							
シジュウカラ							
ゴジュウカラ科							
ゴジュウカラ							
メジロ科							
メジロ							
ホオジロ科							
ホオジロ							
ホオアオカ							
シマアオ							
アオジン							
オオジュリン							
アトリ科							
カワラヒワ							
ベニマシ							
イカル							
シメ							
ハタオリドリ科							
ニュウナイスズメ							
ムクドリ科							
コムクドリ							
ムクドリ							
カラス科							
ハシボソガラス							
ハシブトガラス							
カケ							

(31科 114種)

059-13 苫小牧市植苗150-3

(財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ ネイチャーセンター内

昭和57年度 総会経過報告

と き 昭和57年4月17日(土) 午後2時～4時30分

ところ 北海道婦人文化会館

総会は井上会長を議長に選出した後、56年度の事業報告、57年度事業計画、新役員についての審議が行われ、原案どおり可決されました。今総会の案内が野鳥だよりの発行が遅れたため、会員に徹底できず、結局、役員だけの総会になってしまい執行部一同大いに反省しております。

1. 56年度事業報告、決算報告、監査報告について

<事業>

- (1) 探鳥会 (56年4月から57年3月まで12回実施)
- (2) 野鳥だよりの発行 (44号～47号までの4回発行)
- (3) その他の活動
 - ・新年懇親会の開催
 - ・干潟鳥類全国一斉調査への協力
 - ・チェックリストによる野鳥分布調査
 - ・野鳥写真展の開催
- (4) 決算報告 収入－支出＝差引残額 397,498円

昭和56年度決算・収入の部

区分	決算額	予算額	摘要
繰越金	65,479円	65,479円	
会費	719,700	59,100	{57年度以降の仮受分 98,500円を含む
寄付金	30,500	10,000	3件
参加費	16,800	20,000	{新年会 8,800円 藤の沢 8,000円
売上金	235,200	210,000	{野鳥だより 200,000円 探鳥パンフ 35,200円
雑収入	115,454	3,521	{ネクタイピン事業 110,000円
合計	1,183,133	900,000	

昭和57年度予算・収入の部

区分	予算額	摘要
繰越金	397,498円	57年度以降の仮受分98,500円含む
会費	498,000	314名、6団体
寄付金	10,000	
参加費	20,000	新年会等
売上金	220,000	野鳥だより 200,000円他
雑収入	4,502	預金利息
合計	1,150,000	

<監査>野村監事により適正なものと報告されました。

2. 昭和57年度事業計画と予算

<事業>

- (1) 探鳥会 (57年4月から58年3月まで12回開催)
 - ・探鳥幹事の他に他の担当幹事にも積極的に探鳥の手助をしてもらう。
 - ・探鳥のための手引書を作り、探鳥会の一定のパターンを作る。幹事用の腕章、参加者のためのネームプレートを作り、コミュニケーションを活性化させる。
- (2) 野鳥だより (48号～51号まで4回発行)
 - ・チェックリストにより野鳥分布図の作成
 - ・地方連絡員(地方編集担当幹事)体制確立
- (3) その他の事業
 - ・新年懇親会開催
 - ・干潟鳥類全国一斉調査の協力
 - ・野鳥写真展の開催
- (4) 57年度予算

昭和56年度決算・支出の部

区分	決算額	予算額	摘要
印刷費	381,300円	460,000円	野鳥だより他
通信費	146,905	180,000	野鳥だより送料他
会議費	56,990	70,000	総会、編集会議他
消耗品費	10,160	15,000	写真パネル他
賃金	21,080	25,000	チェックリスト整理他
報償費	59,200	76,000	探鳥会手当他
予備費	110,000	74,000	ネクタイピン事業
合計	785,635	900,000	

昭和57年度予算・支出の部

区分	予算額	摘要
印刷費	450,000円	野鳥だより 400,000円他
通信費	190,000	野鳥だより発送 140,000円他
会議費	71,000	総会、編集会議他
消耗品費	15,000	事務用品等
賃金	30,000	チェックリスト整理費他
報償費	76,000	探鳥会手当他
予備費	318,000	
合計	1,150,000	

3. 役員選出

高齢のため勇退を希望していた、小沢広記氏、多忙のため辞意の表明をしていた金田寿夫氏に代り、新しい幹事として紅林雅文氏、岩泉ゆう子さんを迎えました。

また、小沢氏など長年、愛護会に功績のあった役員のリ任後の処遇を検討することを決め、具体策を会長に一任しました。総会後の新幹事会で代表幹事と担当幹事、キャップ幹事が決まりましたのでお知らせします。

会 長 井上元則
副 会 長 荻野寿衛吉、佐々木 勇、斎藤春雄
新妻 博、土屋文男
監 事 谷口一芳、野村梧郎

代表幹事 小堀煌治
会計幹事 ○渡辺紀久雄、柳沢千代子、新宮康生
総務幹事 ○島田明英、飯山五玖子、岡田幹夫
小堀煌治、岩泉ゆう子
探鳥会幹事 ○北尾 諭、羽田恭子、梅木賢俊
亀尾紋十郎、野口正男、早瀬広司
平井さち子、中野高明、渡辺俊夫
長谷川涼子、紅林雅文
広報幹事 ○白沢昌彦、柳沢信雄、村野紀雄
萩 千賀、猿子正彦

(○印は担当代表者)



野 幌 57. 2. 21 9:00~13:00 浅 沼 佳代子

冷たい風が吹き、枝からハラハラ雪が舞い落ちる中、私にとって初めての野幌での探鳥会が始まりました。ベテランの方達に教えて頂き、何羽の鳥と顔見知りになれるかなと、私の心は期待に胸がふくらんでいました。

挨拶もそこそこに、入り口付近で最初に会えたのはウソでした。止まっている枝まで教えて頂きながら、なかなか見つけられず、気持ちだけがあせる私の双眼鏡の中にその姿がしっかりおさまってくれたのは、皆さんが歩き出す直前でした。大沢の入り口から歩き始め、ほどなくアカゲラ、ヤマゲラを見ることができました。アカゲラの腹の鮮やかな赤、ヤマゲラの背中の中緑色の不思議な美しさに目を引きつけられました。アカゲラ同士のささやかな喧嘩を見逃してしまったのは、残念でした。桂コースを辿りながら、双眼鏡におさまるやいなや、飛び立ってしまったツグミ、枝の合い間にちょこんと休息していたカケス、声だけ聞こえたキクイタダキ、枝に止まっていたトビの姿などの中で、私が最も印象的だったのは、トビの姿でした。いつもは空高く飛ぶトビしか見たことがなかったのに、枝を透かして見えるそのトビは、骨休めというか、羽休めをしてじっと止まっているので

した。私はその姿に何か威厳のようなものを感じると共に、じっと見つめ合っていると、その足で空へ舞い上げられていくような、そんな気さえしてくるのでした。

どの鳥を見ても、殆んど初めてという私にとって、口ばしの形、腹や背中の色、大きさひとつひとつが新鮮に頭の中へ焼きつけられていくのでした。ベテランの方達の、毎年ある種の鳥が訪れる木、食べている木の実のことなど、興味深い話を聞きながら、仕草や姿の愛らしさを感じるだけでなく、その生態についても知りたいと深く感じた一日でした。最後に、幹事の皆さん、どうもごくろうさまでした。

〔記録された鳥〕 トビ ヤマゲラ アカゲラ オオアカゲラ コゲラ ヒヨドリ ツグミ キクイタダキ エナガ ハシブトガラ シジュウカラ ゴジュウカラ アトリ ウソ イカル スズメ カケス ハシボソガラス (ドバト) (19種)

〔参加者〕 霜林耕介・耕一 羽田恭子 田辺 至 後藤芳彦 鶴崎展巨 早瀬広司 長谷川涼子 五十川祐弘 浅沼佳代子 中野 進 浪田良三 北尾 諭 横田通典 大坊孝七 白沢昌彦 渡辺紀久雄 村田信義 鬼頭研二・大志 柳沢信雄・千代子 (22名)

〔担当幹事〕 早瀬広司 北尾 諭

☎069-01 江別市大麻栄町26の5

ウトナイ湖 57. 3. 28 10:30~12:40 後 藤 義 民

もうじき3月も終わろうとしている。本州からは桜のたよりも聞こえるのに、まだまだ湖面には白いものがある。こちに見えるウトナイ湖。風もまだ冷めたい最後の日曜日、私にとって初めての水鳥との出会いである。

今までは主に一人で野幌森林公園を歩いていました。家から車で5分も走ればつく気軽さからです。野鳥に興味をもったというのも、我が家の庭のように手近な所に自然が残されており、だれにも気がねなく、だれにも迷

惑をかけないというところからです。約1年半前です。

しかし、少しずつ鳥に親しみだし、名前もわかり始めるとだれかに話したり、また、図鑑だけではわからない鳥などがあればだれかに聞いて確かめたいというのが人情です。丁度そんなころです、探鳥会があると聞き参加しました。2月に続き今回は2回目です。

とにかく、知っていたのは白鳥ぐらい、それもオオハクチョウ、コハクチョウ、コブハクチョウの見分け方などわかりませんでした。

ウトナイ湖にも早アオサギが来ていようとは思っていませんでした。それも私の数えたところでは50羽を越えていました。ヒシクイ、ミコアイサ、ヨシガモ、マガン等々初めてづくしです。

今回の私の収穫は、私自身22種類(内15種類の水鳥)の野鳥を確認したこと。次からはオナガガモだけは見分ける自信がついたこと。ネイチャー・センターでは安西さんをはじめとする会員の方々の活躍する姿にも接することができました。

そしてなによりも一層、野鳥の素晴らしさにふれたこと

だと思えます。

〔記録された鳥〕 カイツブリ アオサギ マガン ヒシクイ オオハクチョウ コハクチョウ マガモ カルガモ ヨシガモ ヒドリガモ オナガガモ キンクロハジロ ホオジロガモ ミコアイサ カワアイサ トビ オジロワシ オオワシ ツルシギ シロカモメ カモメ ハクセキレイ ヒヨドリ ツグミ シジュウカラ ホオジロ スズメ ハシボソガラス ハシブトガラス (コブハクチョウ) (31種)

〔参加者〕 藤沢忠勝・明子・伸也・安樹・尚子 横田通典・円 青木二郎 萩 千賀 新田順子 岩泉ゆう子 柳沢信雄・千代子 霜村耕介・耕一 浅沼佳代子 長谷川涼子 松原 茂・道 梅木賢俊・翼・鉄也 西村辰夫・千世子 土田純一 羽田恭子 間ヶ敷利正・泰子・真知子・圭子 後藤義民 渡辺紀久雄 長岡宏幸・滋雄 鶴崎展巨 北尾 諭・久美子 横山和成 菊地美子 早瀬広司 大坊幸七 浪田良三・典子 (43名)

〔担当幹事〕 梅木賢俊 北尾 諭

☎061-01 札幌市白石区もみじ台E-23-206

野 幌

57.4.25 8:30~13:50

国 島 峯 夫

4月25日、すばらしい晴天にめぐまれて、野鳥愛護会が主催する「探鳥会」に妻と参加した。朝、汽車が走らないというハプニングもあって、集合時刻に間に合うため少々気をもんだ。

集合地の大麻駅前を出発して、道立図書館周辺から早くも小鳥のさえずりが耳に入り早速双眼鏡をのぞく。大沢口で、すでに直行していた方々と合流し、挨拶や説明の後いよいよ探鳥の本番に入った。

小鳥の鳴声に、木々の梢に目をやりその姿をさがす。説明をして下さる方から出来るだけ離れないようにしても、上を見て鳥の姿をさがしていると、つい遅れがちになる。静かな林の中ではいろいろな小鳥の声が聞こえるのだが、全くの素人の私にはどれも同じように聞こえ、一生懸命説明して下さる方に申しわけない気がした。

足もとにはまだ雪が残っている所があるが、さすがにもう春本番で、美しい福寿草やミズバショウがとても印象的だった。

しばらく歩かうち、すぐ近くで、ゴジュウカラが幹を垂直に上下するかわいい姿を見て、やっと探鳥会に来た実感がわいた。探鳥会では、むしろ遠くの小鳥の姿や美しい鳴声を楽しむ面もあると思うのだが……。

谷あいの道で、街ではとても耳にすることが出来ない美しいウグイスの声を聞いた。空は真青、そして松の緑きれいな空気と美しい小鳥の声につつまれたすばらしい自然にふれ、私は生命の洗濯をした気がした。

天気が良すぎてあまり小鳥の姿が見られなかったと

いうものの、私にとっては充分すぎるくらいすばらしい一日であった。家族づれの方々やご夫婦の方が多かったが、自然に親しみ、自然を愛しておられる姿を本当にすばらしいと思う。

終りの会で、リーダーの方から、今日出合った小鳥の種類が32種と聞き、さすがに聞き分けられる耳のすばらしさにおどろいた。私は最初のお話のように、やっと6~7種が確かめられただけである。日頃の運動不足の解消を兼ねて参加したが、運営にご苦労されている方々に感謝し、これを機会にこれからは少しずつ小鳥と仲良くなりたいと思いながら帰路についた。機会をみて、ぜひまた参加してみたいと思っている。

〔記録された鳥〕 トビ キジバト ヤマゲラ アカゲラ コゲラ ヒバリ ハクセキレイ ビンズイ ヒヨドリ モズ ノビタキ クロツグミ ツグミ ヤブサメ キクイタダキ エナガ ハシブトガラ ヒガラ ヤマゲラ シジュウカラ ゴジュウカラ ホオジロ アオジ カワラヒワ ベニマシコ イカル ニュウナイスズメ スズメ ムクドリ カケス ハシボソガラス ハシブトガラス (ドバト) (34種)

〔参加者〕 出口 好・真帆 霜村耕介・耕一 谷口登志 大坊幸七 西村辰夫・千世子 畑中太祐・まきこ 三上真吾 国島峯夫・弘子 吉野 誠 長谷川涼子 伊藤俊和・幸江 堀川祐雄・セツ 北尾 諭・久美子 新田順子 曾根モト 青木二郎 梯 伸夫・裕紀子・よし子・くみこ 坂本真由美 長岡宏幸・範子 福井すえ

黒田聖子 五十川祐至・祐弘・ハナ子 後藤義民・りょうこ 横山和成 菊地美子 新妻 博 浅沼佳代子 山口卯夫 田辺 至 園部恭一 佐野 優 平井義智 叶野駒夫 村上りょうこ 羽田恭子 林まゆこ 小嶋順子 紅林雅文 菊川昭夫・きよ子 間ヶ敷利正 柳沢信雄

川郡部有蔵 浦川昌雄 岩泉ゆう子 野口正男 横田通典・円 関口健一 宮田 草彌 (66名)

〔担当幹事〕 柳沢信雄 野口正男

☎063 札幌市西区西野6条7丁目586

探鳥地案内

⑱ 羊蹄山麓半月湖周辺

◆位置 倶知安駅より国道5号線南へ約7km

◆概況 半月湖は、支笏洞爺国立公園の一部で、流れ入る川も出る川もなく年中水位の変わらぬ不思議な湖として知られている。周囲は四季それぞれに美しく変化 する深い林に囲まれ、千古の謎と静けさをたたえて、野鳥に絶好の憩いの場を提供している。

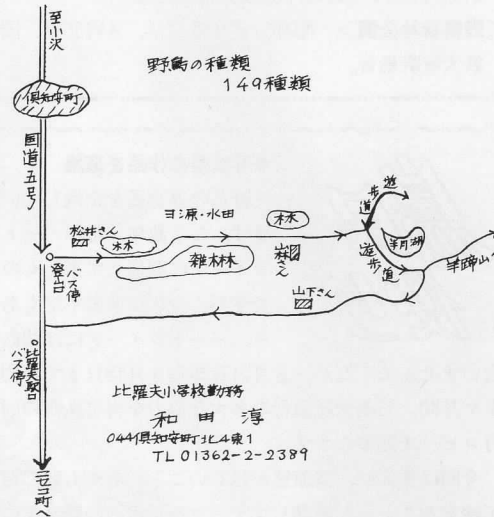
◆交通 駅前より道南バス・ニセコバスの両社があり極めて便利。羊蹄登山口または比羅夫駅入り口で下車

◆探鳥コース 私のすすめたいコースは、登山口バス停で下車、秀峰羊蹄へ向かうコースである。降車してちょっと寄り道であるが、バスの進行方向へ20m程度行くと「登山橋」という小さな橋がある。冬、その下を覗くと必ずといってよい程「カワガラス」の姿を見ることができ、初夏には右側の水田で、子連れ「パン」を連よく眺められることがある。再びバス停に戻り、本来のコースを辿る。ゆるやかな坂を登り始めると、直ぐ左側に庭園業を営む松井さんの庭があり、コガラ・シジュウカラ・シメ・ヒヨドリを樹間に見ることができる。

そこから続くカラ松林を過ぎ、そして、右側にはシラカバを主とした雑木林があり、左側にはヨシ原や水田が広がる一帯となる。ここでは、コヨシキリ・オオヨシキリ・カンラダカ・ホオジロ・ウソ・ベニマシコシマエナガ・アカゲラ・オオアカゲラ・ヒガラ・アオジ・カワラヒワ、時にはあわてて道路を横切るクロテンを見ることがある。

その道を真直ぐ行くと、本当にここが羊蹄山の麓だと思える所に山林さんという一軒の農家がある。この家の周辺でもシマアオジを始め数多くの野鳥を見ることができる。そこから農道になり、半月湖迄約500m程となる。ヒバリの声を聞き空を見上げるうちに、ノスリの帆翔を見ることがある。森の入口では、番兵ずらして山林さんの飼いだの鳴き声を真似るミヤマカケスや、不意に飛び立って驚かすキジバト・カッコウに逢うことがある。

坂がきつくなる山道を「半月湖は、まだか……まだか」と登るうちにやっと平地に出る。ここが半月湖の見晴らし場所である。汗を拭きながら見下ろす湖面は



神秘的な緑色をしていてさわやかな涼気を漂わしてくれる。春であれば、のびやかに打ち鳴らすキツキ科のドラミングの歓迎の音に驚き、秋であれば湖面に浮かぶ100羽以上の水鳥達の姿に興味をそそられるだろう。

何かの気配で振り向くと、樹幹を這うキバシリ・ゴジュウカラ・コガラ、木陰にジッとしているオオルリ・コルリを見ることができ、遊歩道を美声を視線で追いつきながら歩くとキビタキ・ウグイスの名鳥を見ることができる。遠くのツツドリの声に耳を傾けていると突然近くで響き渡るアカショウビンやアリスイの声……。野鳥の楽園である。

帰途の下山コースでは、砂利道を注意して下るとルリビタキの可愛らしい姿を見ることができ、麓の山下さんの家の辺りからは、ハクセキレイ・キセキレイ・モズの姿が多くなる筈である。

半月湖は、きっと探鳥者の皆さんを満足させてくれると私は信じて疑わない。

◆見ることができる動物

ウサギ・イタチ・シマリス・エゾリス

◆絶対見られない動物 ヒグマ・オオカミ

◆絶対来てほしくない動物

自家用車を乗り入れるニンゲン

☎044 倶知安町北4条東1丁目 和田 淳



10月までの予定をお知らせします。旅の途中のシギやチドリを鶴川河口で。野幌では、いよいよ冬鳥のシーズンの始まりです。タカの渡りが見られるかもしれません。

＜鶴川＞ 昭和57年8月29日及び9月19日、何れも午前9時10分、国鉄日高線鶴川駅集合。

＜野幌森林公園＞ 昭和57年10月24日、8時30分、国鉄大麻駅集合。

＜野幌森林公園を歩きましょう＞

上記の探鳥会のほか、次の探鳥散歩を行います。どうぞご参加ください。 9月26日、10月10日
いずれも午前8時30分、大麻駅集合です。

- ・暴風雨以外は小雨でも行います。
- ・昼食、筆記用具、観察用具、雨具等ご持参下さい。
- ・当会発行のテキストを、利用したいと思います。初心者で、すでに買われた方は、探鳥会にご持参下さい。また、当日は、一部100円でご希望の方にお分けしております。
- ・探鳥会についてのお問い合わせは 北尾 611-6455 へ



◆写真展の作品を募集

野鳥の写真展を企画しています。ここ数年、毎年バードウィークに開催して来たものですが、今年は準備不足もあり、バードウィークには間に

合いませんでしたが、8月21日から9月18日までの約1ヶ月間、三菱信託銀行の多大な協力を得て札幌の同行ロビーで開催します。

今回は季節柄、清涼感がほしいこと、しかも秋の渡が始まることなど考慮してテーマを「水辺の野鳥」にしぼりました。「水辺の野鳥」の定義は厳密に考えていませんのでタンチョウから海鳥まで広義に解釈して下さい。

＜募 集 要 領＞

- ◇ テーマ「水辺の鳥」にふさわしい作品
- ◇ サイズは四切り以上でカラー（原則として）
- ◇ 応募枚数は1人1点まで
- ◇ 作品には、鳥の名前、撮影年月日、撮影場所、撮影者、など記入して下さい。
- ◇ しめ切りは8月5日まで
- ◇ 送り先は本会事務局まで

なお、展示できる枚数には制限がありますので全作品を展示できないこともありますのでご了承下さい。

作品は展示後、責任を持って返送します。

◆齋藤春雄副会長の叙勲

齋藤春雄副会長は、タンチョウの保護をはじめ永年におわたる野生鳥獣保護の功勞により勲5等瑞宝章を受章されました。

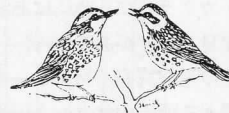
齋藤副会長は、昭和7年北海道帝国大学を卒業された後、北海道庁に奉職され、昭和43年に退官されるまで35年間鳥獣行政一筋に貢献されました。

この間、日本野鳥の会札幌支部を結成（昭和14年）し、また昭和45年に結成された北海道野鳥愛護会の副会長を務められるなど野鳥保護団体の育成、発展にも尽力されております。

現在、野鳥、自然保護関係など各種の団体等の役員委員を務められております。

◆おわびと訂正

野鳥だより47号の4頁、右側の欄の上から11行目「とても信じられないがオジロワシが1羽」とありますが、これはオオワシの誤りでした。おわびして訂正いたします。



〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

夏鳥が続々とやって来てバードウォッチャーには、やはりうれしい季節ではないでしょうか。札幌では、桜の花が満開の頃にはセンダイムシクイがショウチュウ一杯グイーとさえざり、まさに花見と言ったところで

した。

本年度の総会で新役員が決まり、広報担当幹事の顔ぶれは昨年とほぼ同じメンバーとなりました。会員皆様のご意見をお寄せいただき、より良い野鳥だよりの発行をしていきたいと考えておりますので、よろしくお願ひします。（白沢記）

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 1,500円（会計年度4月より） 郵便振替 小樽 1-18287
☎060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465